

頭頸部悪性腫瘍に対する放射線併用動注化学療法の治療効果判定

中谷寛之, 星 秀樹, 杉山芳樹, 古内秀幸, 澤田剛光

岩手医科大学歯学部口腔外科学第2講座
020-8505 盛岡市中央通1丁目3-27

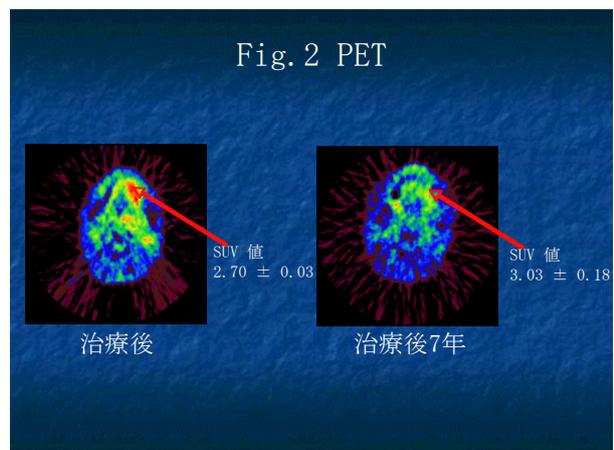
1 緒言

当科では頭頸部悪性腫瘍に対して機能と形態の温存を目的に、放射線療法と抗癌剤を動脈から投与する化学療法を併用した治療方法(以下放射線併用動注化学療法と略します)を行ってきた¹⁻³⁾。最近では、CTやMRIなどを用いた治療後の効果判定の難しさに苦慮することが多いため、FDG-PETによる治療効果判定を加えて行うようになった。今回は頭頸部悪性腫瘍に対する放射線併用動注化学療法後にFDG-PETによる治療効果判定により、外科手術を回避できた症例を報告する。

2 症例

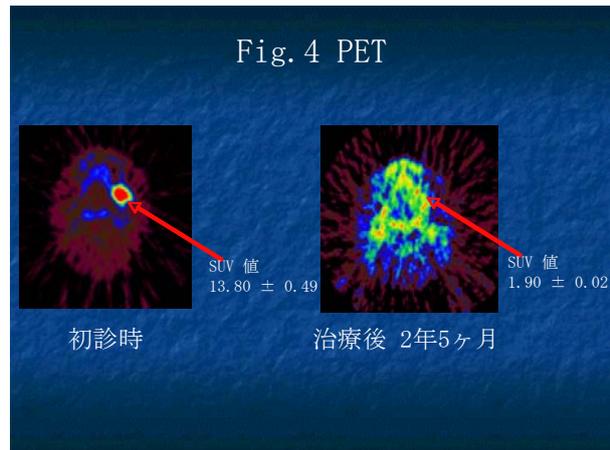
症例(1)

65歳, 男性。4ヶ月前に左側舌側に違和感を認めるも口内炎と思い放置していたが, 2ヶ月前から疼痛が生じ会話がしにくくなり腫瘍の増大を認めたため受診。生検にて扁平上皮癌の診断を得て, 放射線併用動注化学療法を行った。治療後, 臨床的, FDG-PET所見的に腫瘍の消失を認めた。治療後7年腫瘍の再発を認めていない (Fig.1,2)。



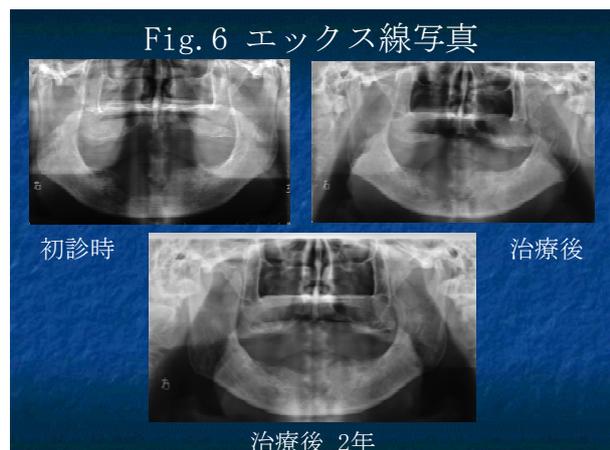
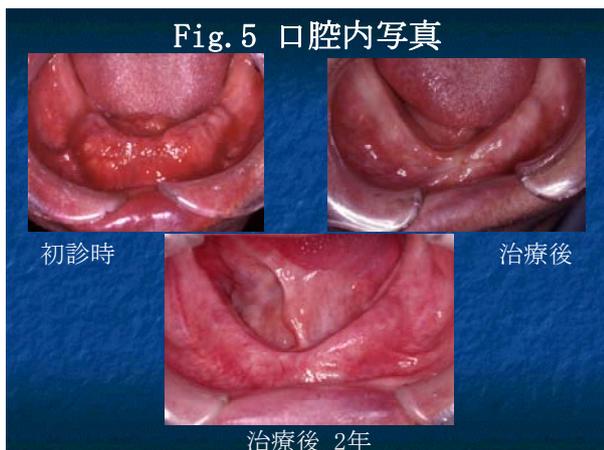
症例(2)

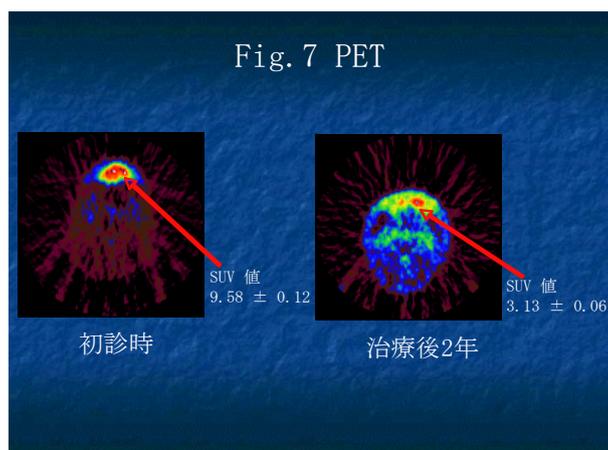
50歳, 女性。3ヶ月前に左下智歯に動揺と疼痛を認め, 同歯を抜去した。抜去後も同部の疼痛持続し, 腫脹も生じてきたため左下第二大臼歯を抜去し, 消炎処置を行った。しかし, 症状の改善を認めないため, 1ヶ月前に病院歯科口腔外科を紹介受診し, 細胞診と生検行い, 扁平上皮癌の診断を得たため受診した。放射線併用動注化学療法を行い, FDG-PETによる治療効果判定を行った。治療後2年5ヶ月, 腫瘍の再発を認めていない (Fig.3,4)。



症例(3)

73歳, 男性。半年前頃より下顎前歯に動揺を認め近歯科受診。抜歯を施行され治癒不全を認めたが, 2ヶ月後に上下顎総義歯を作製した。その4ヶ月後, 抜歯部に腫脹を認め, 義歯調整を行っても改善せず精査勧められ受診。生検にて扁平上皮癌の診断を得て, 放射線併用動注化学療法を行った。本症例も, 治療後腫瘍の消失を認めた。現在も経過観察を行っているが, 腫瘍の再発を認めず, さらに下顎骨の再生を認めている (Fig.5,6,7)。





3 まとめ

頭頸部悪性腫瘍に対し放射線併用動注化学療法施行し、治療後の効果判定に FDG-PET を加えて行った症例を報告した。今回報告した3症例とも現在までに再発もなく経過良好である。

参考文献

- 1) 星秀樹, 関山三郎, 他: 口腔癌に対する放射線併用動注化学療法の効果. NMCC共同利用研究成果報文集9:42-44, 2002.
- 2) ^{18}F FDG-PETによる口腔癌に対する放射線併用動注化学療法の治療効果判定. NMCC共同利用研究成果報文集10:38-44, 2003.
- 3) 星秀樹, 中谷寛之, 他: 口腔癌に対する動注, 放射線同時併用療法の治療効果判定. NMCC共同利用研究成果報文集11:43-47, 2004.

Usefulness of ^{18}F FDG-PET in assessing the therapeutic effects of intraarterial concurrent chemoradiotherapy for head and neck cancer

Hiroyuki Nakatani, Hideki Hoshi, Yoshiki Sugiyama, Hideyuki Furuuchi
and Takemitsu Sawada

2nd Department of Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Iwate Medical University
1-3-27 Chuodohri, Morioka, Iwate 020-0805, Japan

Abstract

The present study investigated the usefulness of ^{18}F FDG-PET in assessing the therapeutic effects of intraarterial concurrent chemoradiotherapy for head and neck cancer. Subjects were 3 patients in whom intraarterial concurrent chemoradiotherapy was performed at our hospital, after which ^{18}F FDG-PET was conducted in order to assess the therapeutic effects. Therapeutic effects were assessed in terms of tumor radioactivity at 40-50 and 50-60 minutes after ^{18}F FDG administration in relation to the administered ^{18}F FDG dosage. The results of the present study suggest that ^{18}F FDG-PET is useful in assessing the therapeutic effects of intraarterial concurrent chemoradiotherapy.